MAPLE NEWS

2008年 Vol.61

IT時代に生きる

「ちょっと来月、カナダに行ってくるよ」

ベランダで土いじりをする耳に、息子の声が入ってきた。

3歳で離婚し日本に連れて帰ってきたが、機会を見ては父親に会いたければ、何時でも飛行機の切符は用意するからと、言っても反応は今ひとつ。

社会人になって3年、そろそろ転職を考えており、新しい仕事を始めると長い休暇は取れないので、この機会に会ってみようと思ったらしい。

事の始まりはこの様だ。大学時代1年間休学しイギリスに留学していた頃の友達に、3月に入り一斉メールを流したところ、父親のメール・アドレスに引っ掛り「会えたら良いね」と返信が入ったと言う。

父親には写メールを送っているし、再婚していればホテル代を持っているので、自分で宿先を探すから大丈夫と、いとも気軽に言い残し出発した。

地下鉄に消える息子の後姿に、熟した柿の実がポトッと落ちるシーンが重なり感慨深いものが込み上げてきた。

留学を転地教育の軸にしたカンセリングは、本人の気持ちが動いた瞬間を見逃さない真剣勝負。それから始まる親御さんとの連携プレイは、加速度をつけて留学準備に入る。

出発後の留学生は、時差に関係なくカナダ、イギリス、ニュージランドからメールを発信して来る。それに振り回される親御さんには、即答を控え要求している内容を、もう一度、子供が考える時間を与えるアドバイスをする。

私が留学した頃は、日本から届く手紙を開くワクワク感があったが、今の留学生からはそれは失われている。

この10年間の仕事を振り返ると、ＩＴ時代の便利なツールにより内面の世界を持たなくても済み、持っている暇がない余裕のない時代に突入している実感がある。

長年ジャーナリズムの世界にいた人間として、生声を聞きながら相手の表情を読み取る取材で培った嗅覚は、絶対に錆付かせてはいけない今の仕事の大切な大切な宝物。

携帯電話を持たないと言うと怪訝な顔をされるが、即、連絡できる安心感はイマジネーションの欠如に繋がる気がするし、携帯電話で仕事とプライベートを切り変える体内スイッチを邪魔されない余裕は持ちたい。

一斉メールがツールになり、父親と再会した息子のエピソードから、改めてＩＴ時代に生きる功罪を考えさせられた。

Michi recommends
響く本『君たちどうする?』

小野田寛郎
（おのだ・ひろお）

大正11年（1922）、和歌山県生まれ。
昭和14年（1939）、旧制海南中学校卒業後、貿易商社に就職し
中国・漢口（現・武漢）に渡る。
昭和19年（1944）1月、久留米第一予備士官学校に入学。
同年9月、陸軍中野学校二俣分校に入校、
12月にフィリピン戦線へ派遣される。以後30年間、
作戦解除命令を受けることなく任務を遂行。
昭和50年（1975）春、ブラジルに渡り牧場の開拓と経営を開始。
昭和59年（1984）、子どもたちのキャンプ「小野田自然塾」を開く。
現在は（財）小野田自然塾理事長。
著書に「たった一人の30年戦争」「わが回想のルバング島」などがある。

自然塾が法人認可を得る前、現在の子どもの状態とキャンプそのものの勉強を目的に、私は名古屋でその十五年も前から「時代の流れに逆行している」と批判されながらも子どものキャンプを続けていた「尾高会」のみなさんと一緒に、鈴鹿の山で活動を始めました。「尾高会」の人たちは自分で「ガキ大将」「腕白小僧」などと名乗り、開放感あふれるグループでした。

このグループの山地縦走の最後の宿泊地は展望のきく稜線でしたが、そこでみんなに将来の夢を語ってもらいました。なかの1人が「僕はジャンボ・ジェットのパイロットになりたい」と言いました。

他の子どもたちは「出たぞ、出たぞ、でかく出た」などとはやし立てましたが、私は、「そうか。僕も君たちの年なら、なってみたいなあ」と言い、「でも英語も数学もよくできなければパイロットの試験には通らないし、体に故障があってもだめだから、簡単じゃないぞ」と真顔で説明しました。

そして、「思った事は途中で投げずにできるまでやれば、きっと成功するはずだ。忘れるなよ」と励ました。他の子もシンとなって聞いていましたが、昨年、名古屋から連絡があって彼が「晴れてパイロットになった」と知らせてきました。

こちらが忘れていたことだったので驚きましたが、他にもう一人パイロットに合格した子が出たという知らせが来ました。都合二名が念願かなったことになり、本当に嬉しい話でした。もともと、たとえ一人でも二人でもよい、目標を自分で立てて逞しく生きていって欲しい。そう思って始めた自然塾なのですから、こういった知らせが私にとって何よりの宝物なのです。

自然塾では子どもたちが何かを発見し何かに感動することで、自分の本質を見出し、夢を抱くようになってほしいのです。夢はいずれ希望に変わり、具体的な目標になっていくでしょう。そうすれば、「指示待ち」などと批判されなくなるはずで、それこそが私が本当に願っていることなのです。

人間は追い詰められたとき真剣に生きるための手段を考えたなら、眠っている潜在能力が目ざめて、思いもよらぬ力を発揮するのです。冷静に現状を把握して、危険を恐れずやるべきことを命がけで断行したなら、必ず進むべき道が見えてきます。

私は今の日本の子どもたちに、そのことをわかってほしいと願っています。引きこもりの状態に陥ったり、キレて犯罪に走ったり、自殺してしまったり、人生を放棄してしまうことだけは絶対にしてほしくないのです。

ルバングから日本に帰国して三十年が経過しました。その間に日本人、そして日本という国自体もしだいに活力を失いつつあるように感じています。どんな状況においても生きる目的を明確に持ち、自分の能力をフルに活かして生きる。私が今までの人生で培ったその基本的な姿勢を、今後も自然塾の活動を通じて少しでも伝えていきたいと思っています。

人は皆、生きる能力を持ち、生きるために生まれてきているのだと信じて生き抜いてほしいです。

☆小野田夫妻とMichi

Yuki Kawashima

今回ニュージーランドに行って私はいろいろな新しいことを学びました。私は美容に興味があり、将来は美容師になりたいと思っているのですが、他にもメイクやネイルなど、美容に関わること全般やりたいので、今勉強中です。そこで母が、語学勉強も兼ね、ニュージーランドでできるメイクオーバーコースの話を持ってきてくれました。英語はあまり得意ではないのですが、メイクの話がとても魅力的だったので一人でも行ってみようと決心しました。メイクオーバーコースはホームステイをして、その家からメイクの先生の自宅で1対1のレッスンをしていただきます。テーマを1日ごとに決めてテーマにそってモデルさんにメイクをさせてもらいました。ベースから色使いなど、その人に合ったメイクや、状況に合ったメイクを教わりました。1対1という言うのがとてもよい環境で、とてもわかりやすく教えていただけました。面倒を見てくれたスタッフの皆様が組んでくれたスケジュールはとても充実していて、全てにおいてよい選択をしてくれました。メイクの先生はもちろん、ホームステイの家族も最高の家を選んでいただき、語学の授業もとてもわかりやすく、優しい先生を選んでくれました。ニュージーランドの環境は素晴らしく、緑がたくさんで山も海もとても美しいので気持ちよい生活を送れました。食べ物が美味しいものばかりでどこで食べても大満足でした。メイクとエステとヘアの学校見学をさせてもらいました。

設備がよく、先生の考え方もとても共感できたので、語学をもっと勉強してメイクとエステだけでも向こうで勉強できたらと思いました。今回一人で海外へ行って一部ではあるけど違う国の文化にふれることができてとてもいい体験ができたと思っています。

少し前の自分だったら考えられないくらいの行動力も発見できたので、これから少しずつ踏み出していきたいと思っています。

ENGLISH JAPANESE STUDIES
CANADIAN ACADEMY SETAGAYA
2-2-15 SHINMACHI SETAGAYA-KU, TOKYO, 154-0014, JAPAN TEL FAX 03-3428-2444
BRANCH:KOKUBUNJI,ENGLAND